

人間と植物をめぐる複数の視点

—オーストラリアにおけるネイティブ・プランツの養苗から呼び起こされるもの—

前 川 真 裕 子

要 旨

本論はオーストラリアに固有のブッシュの自然を生み出しているネイティブ・プランツと呼ばれる植物に注目するものである。特に、ネイティブ・プランツの養苗と販売に従事するメルボルンの人々に焦点を合わせる。ネイティブ・プランツの活動に従事する人々が植物という人間ではないものを含む様々な行為者たちとの関係性の中に身を置く様子を明らかにしていく。先行研究ではネイティブ・プランツで構成されるブッシュの自然がナショナル・アイコンとしてオーストラリアらしさの創出を担ってきたと論じられてきたが、本論ではネイティブ・プランツに関わる人々が多様な行為者と繋がるなかでナショナルなものへの希求とは異なる複数の視点へと接続されていく様子を分析する。

キーワード：オーストラリア，人間と自然，ネイティブ・プランツ，複数の視点，行為者

1. はじめに

近年、オーストラリアではブッシュと呼ばれる同国に特徴的な自然が再評価され高く位置付けられている。それまでは大陸内陸部の厳しい環境の広がる危険なフロンティアとしてイメージされてきたブッシュの自然は、現在ではより身近で親しみのあるものへと変化しつつある。オーストラリアらしいランドスケープの再創造が目指され、都市部においてもブッシュの自然を構成する同国固有のネイティブ・プランツに注目が集まるようになった。本論では、メルボルンに暮らすヨーロッパ系オーストラリア人¹⁾たちがネイティブ・プランツに関する活動を媒介にしながらオーストラリアという土地に対して、どのような視点を構築しているのかを考察するものである。特に注目していくのはヴィクトリア州のメルボルンでネイティブ・プランツの養苗と販売に携わっている人々の活動である。まず次節では、ブッシュの自然がオーストラリアの中で注目をあびるようになった歴史的背景を先行研究と共に整理し、筆者のフィールド調査がどういった社会的文脈の延長線上にあるものか押さえておきたい。

2. ブッシュの自然をめぐる先行研究

ネイティブ・プランツとはオーストラリアに固有の植物を意味する。代表的なネイティブ・プランツに、ユーカリ（フトモモ科ユーカリ属の総称）、ワットル（マメ科アカシア属の総称）、

ティーツリー（フトモモ科コバノブラシノ属の総称）などがある。これらネイティブ・プランツは「ブッシュ」と呼ばれるオーストラリアの自然環境を生み出している。一般的にブッシュという英単語は低木を中心とした草木の茂みを意味するが、オーストラリアにおけるブッシュとはネイティブ・プランツで構成された同国内陸部に特徴的な自然環境のことを指す。以下では関連する先行研究の議論を紹介しながら、ブッシュをめぐるオーストラリアの自然について整理をしていきたい。

エレイン・サーウォンカによると、ブッシュの自然がメルボルンなど都市の生活へ組み込まれるようになったのは1940年代頃からのことであると言う。それにはメルボルンなど都市部で活躍していたランドスケープ・デザイナーたちが大きな役割を担った。特に1950年代から1960年代にかけて活躍したランドスケープ・デザイナーたちは、それまでオーストラリアで一般的であった「イングリッシュ・コテージ・ガーデン」から距離をとり、オーストラリアらしいガーデンの構想をはじめ。ユーカリ、パンクシア、カンガルー・ポーなどのネイティブ・プランツを中心とした「ブッシュ・ガーデン」なる庭の誕生である（Cerwonka 2004: 107）。1970年代になると行政の間でもネイティブ・プランツへの注目が高まった²⁾。ヴィクトリア州の知事であったルパート・ハマー卿らを中心にクランボルン・ボタニック・ガーデンを始めネイティブ・プランツを中心にデザインされた幾つかのパブリック・ガーデンが生まれた（Cerwonka 2004: 113）。その他、同州政府はネイティブ・プランツのみを扱う養苗センターに資金援助をするなど、地域住民たちがネイティブ・プランツに親しむきっかけを与え、オーストラリアの自然に積極的に参加することを促すようになった（Cerwonka 2004: 113）。ブッシュの自然に対する認識の変化は1990年代におきた都市開発をめぐる論争にも現れている。当時、メルボルンの市議会では目抜き通りであるスワンストーン・ストリートの街路樹をロンドン・プレインと呼ばれるスズカケノキ科の落葉樹にする街の再開発を予定していた。しかし市議会ではメルボルンの目抜き通りにふさわしいのはヨーロッパの街並みを再現するロンドン・プレインではなく、オーストラリアを代表するユーカリの木ではないかと議論が紛糾したのである（Cerwonka 2004: 134-135）³⁾。このようにサーウォンカは都市の発展や開発を考察しながら、ネイティブ・プランツなどブッシュの自然への高い関心がイギリスなどヨーロッパの自然とは異なるオーストラリアらしい都市の生活を創造するナショナル・アイデンティティの構築と深く結びついていることを描き出した（Cerwonka 2004: 134-135）。サーウォンカはこれを共和制への移行を視野にいれた新しいオーストラリアのナショナリズムを模索する試みであると指摘している。

一方でリビー・ロビンやトレイシー・アイルランドが目指すのはネイティブ・プランツなどブッシュの自然が世界的な環境主義の高まりと共にオーストラリアの人々の間で注目をあつめるようになった背景である。特にロビンはブッシュの自然に対する認識の変化を1970年代に顕著な特徴であると論じている（Robin 1998: 123 cited in Ireland 2003: 61）。この変化は

1960年代にオーストラリアで広がりはじめた環境主義運動から影響を受けたものである。トレシー・アイルランドが指摘しているように、もともとブッシュの自然はオーストラリアの入植史と深く関わってきた。ヨーロッパからの入植者たちはブッシュに手を加え開拓することで「私たちのオーストラリア」を創造してきたのだ。特にブッシュの自然は1890年代ごろを境にヨーロッパ系オーストラリア人たちのナショナルなアイコンとして小説、詩、雑誌、絵画などで繰り返し描写され、ブッシュでの厳しい生活を経験した入植者たちの英雄的な活躍が神話化されている (Ireland 2003: 60-61)。ところが1970年代になると、ナショナル・パークなどの公共空間に積極的に取り入れられるようになったブッシュの自然は、入植期の英雄的活躍から生まれた内陸部のフロンティアとしてのイメージを払拭させ、大切に保護しなければならない「オーストラリアの遺産」というイメージへと変換されていった (Robin 1998: 123)。こういったオーストラリアに独自の自然遺産という認識は、世界的にみても稀な生物多様性を保ち続けているブッシュの自然をオーストラリアのアイコンとして描き出すようになり、ヨーロッパ系オーストラリア人たちに新しいナショナル・アイデンティティを与えるものとなったと言う (Ireland 2003: 62)。

以上、ブッシュの自然にまつわる先行研究を整理してきた。サーウォンから研究者たちはそれぞれ異なる視点からブッシュの自然に関する考察を行なっているが、それらに共通するのはどれもネイティブ・プランツなどブッシュへの関心がナショナルな集団意識に強く結びついているという論点である。本論ではこれらの議論を否定するものではない。しかし以下で紹介していくように、ブッシュの自然に関わることが人々のオーストラリアへの帰属のあり方と深く結びついていることを理解しつつも、それが必ずしもネイションという対象へと向けられた単一の視点から構成されたものではないことを、現在のメルボルンでネイティブ・プランツの養苗センターで働く人々を考察しながら明らかにしていく。

3. ブッシュの自然とメルボルンの人々

本節では都市に暮らすヨーロッパ系オーストラリア人を考察する中でみえてくるオーストラリアの自然をめぐる複数の視点に注目していく。前節で整理してきたように、ブッシュの自然への注目は都市に暮らすヨーロッパ系オーストラリア人の「オーストラリアらしさ」と共鳴するものと言える。それはイギリスを中心としたヨーロッパの文化的影響から距離をとりオーストラリアに独自の共和制的なアイデンティティを模索しようとする試みであったし、また環境主義に刺激をうけながらオーストラリアの新たな遺産としてブッシュの自然を捉え直す試みでもあった。換言すると、サーウォンからが批判的に考察しているのは、植民地としてのオーストラリアが持つ入植、移民、収奪、転移の問題を置き去りにしたまま、共和制や自然遺産という名のもとに新しい単一のオーストラリアが想像されようとしていることである。しかし本節

では、ナショナル・アイコンやナショナル・アイデンティティという汎用な言葉の中に回収しきれない人々の自然との関わりを提示していきたい。特に、ヨーロッパ系オーストラリア人たちのネイティブ・プランツに関わる活動が、人間と自然の複雑なネットワークに組み込まれている様子を明らかにしながら、彼ら自身の社会に対する複数の視点への接続を可能にしてきた様子を明らかにしていきたい。次節ではまず、筆者が2017年より継続的におこなってきたフィールド調査について紹介した後に、メルボルンという都市に住むヨーロッパ系オーストラリア人がブッシュの自然についてどのように認識しているのかを彼らの考える「エコシステム」や「生物多様性」といった鍵概念と共に分析していきたい⁴⁾。

(1) 養苗センター A とスタッフたち

本節で着目するのは、ヴィクトリア州のメルボルンにおいてネイティブ・プランツと呼ばれる同国に固有の植物の養苗、販売、植付けに関わっている人々である。特に注目しているのはネイティブ・プランツのみを扱っている協同組合と、そこで活動しているヨーロッパ系オーストラリア人である。本論では同協同組合を仮名である「養苗センター A」と呼びたい。

養苗センター A はメルボルンの CBD (中心業務地区) からバスで 30 分ほどのところに位置する森林地区内にある。森林地区の入り口に建つバスの停留所から徒歩で 25 分ほど行くと養苗センター A がみえてくる。この森林地区は深い森で構成されている一方で、ポートハウス、ゴルフコース、フットボールの競技場など所々に遊興施設が併設されている。近隣住民にとっては森を散策すると同時に、趣味のジョギングを楽しむことのできる憩いの場所でもある。養苗センター A が協同組合として同森林地区内に誕生したのは 1980 年代半ばのことである。それ以来、近隣地域にネイティブ・プランツを提供している。年間の売り上げは日本円で換算すると約 4000 万円である。メルボルン近郊の同様の団体と比べると中規模の組織と言える。養苗センター A の取引で 7 割を占める得意先は地方自治体であり、市の公共施設などにネイティブ・プランツの苗を卸し、その植付けを行なっている。また養苗センター A では、マネージャーである M 氏を中心に、行政担当者からネイティブ・プランツのコンサルティングを依頼されることも多く、地域の公共施設におけるランドスケープの作り手として部分的にはあるがその一翼を担っている。ちなみにマネージャーの M 氏はオーストラリアで生まれ育った 50 代の男性で、出自的にはイギリスやドイツに遡ることができる人物である。また、その他に養苗センター A の取引先として挙げられるのは近隣の小学校や一般の小売業者である。さらに養苗センター A の事務所前には個人客に向けた販売所が設けられており、ネイティブ・プランツを購入し自宅の庭に植えるという近隣住民たちも頻繁に訪れる。

養苗センター A は 2 種類のスタッフたちによって運営されている。長らくマネージャーを務めている M 氏など数名の有給のスタッフと、それ以外の多くの無給のボランティア・スタッフである。ボランティア・スタッフは火曜日、木曜日、金曜日のチームに別れて養苗の作

業を行っている。各曜日に5名程度のスタッフが割り当てられているが、場合によっては人数の増減がある。また季節によってメンバーの若干の入れ替わりもあるようで、2019年3月の調査では2017年8月の調査で出会うことのなかったボランティア・スタッフに聞き取り調査をすることができた。全てのボランティア・スタッフをまとめあげているのは40代の女性N氏で、ボランティア・スタッフたちから「ボス」と呼ばれることもある。N氏の家族はアイルランドやスコットランドからやって来た移民であるが、彼女自身はオーストラリアで生まれ育った。そのN氏は3つのチームのボランティア・スタッフたちと同様の作業を火曜日、木曜日、金曜日とこなし各曜日ごとに指示を出している。M氏が養苗センターAにおける事務的な責任者であるとするならば、実際の養苗作業の責任者となってネイティブ・プランツの採取や栽培を行っているのがN氏である。

ボランティア・スタッフたちの顔ぶれは定年退職した年配の男性や女性、近隣に住む主婦たち、ガーデン・デザイナーを目指す人、ホーティカルチャーと呼ばれる植物の栽培に関する学問を専門的に学ぶ若い学生たちなどである。定年退職した人々の中には建築家として働いていた人、看護師をしていた人、カスタマー・サービスで働いていた人などがおり、さまざまな業種の人々で構成されている。ちなみに、これらのボランティア・スタッフたちはイギリス、アイルランド、スコットランド、ドイツなどヨーロッパの国々に家族の出自を遡ることができるという人々である。その中には自らの出自を「オーストラリアン」とだけ認識している人もいる。オーストラリアではヨーロッパに出自的背景を持つ人が自らを「オーストラリアン」とのみ認識している場合が少なくない。これは両親の家系を遡る過程で特定の国や集団に絞ることができない場合や、自らの出自について詳細を知らない場合などが主な理由である。また、ボランティア・スタッフたちは一様に自分たちの身の回りにある自然に高い関心があり養苗センターAの活動にボランティアとして参加している。自宅の庭で植物を栽培する中で自分たちの住む周囲の環境問題について考えるようになった人、緑の少ない無機質な職場で長く働くうちに自然と触れ合う必要性を感じたという人、あるいは後述のようにブッシュ・ファイヤーと呼ばれる森林火災を経験しオーストラリアの自然環境に危機感を持つようになった人などである。このようなスタッフたちの育てたネイティブ・プランツの苗は公共施設や小学校などの環境を作り出しており、メルボルンのランドスケープは行政と住民の共同作業によって生み出されていることが伺える。その他、養苗センターAはホーティカルチャーを学ぶ学生たちのインターンシップの場ともなっており、近隣の専門学校などから定期的に数名の学生を預かっている。養苗センターAは学生たちの学びの場としての役割も担っており、地域社会との密接な関係が保たれている。若い学生の中には卒業後に自分で商売を立ち上げようという人もいる。養苗センターAで培ったネイティブ・プランツに関する知識は若い世代へと受け継がれメルボルンの人々の間で広がりを見せている。

前述のように、メルボルンにおいて公共施設等でネイティブ・プランツが積極的に用いられ

るようになったのは1970年代に入ってからのことである。メルボルンでは多くのネイティブ・プランツを専門とした養苗センターが生まれた。養苗センター A はこのような1970年代の社会的変化をきっかけに創設された団体であり、メルボルンのネイティブ・プランツに関わる活動を考察するにあたり重要な団体であると言える。特に本論では養苗センター A の責任者である M 氏への聞き取り調査及び、実際の養苗を支える N 氏を中心としたボランティア・スタッフたちの語りを中心に分析をおこなっていく。メルボルンにおけるネイティブ・プランツの普及に貢献してきた養苗センター A の現在の責任者である M 氏に注目することで、養苗センター A がどういった理念のもと地域社会の中で運営されてきた団体であるのか明らかになるものと考えられる。また、ネイティブ・プランツなどブッシュの自然に関する知識をボランティア・スタッフたちへ指導する立場でもある N 氏に注目しながら、それらボランティア・スタッフたちがオーストラリアの自然についてどのような認識を日常的に養っているのか整理して行きたい。

(2) ネイティブ・プランツと複数の視点：その1 エコシステム

養苗センター A の活動を支える理念は幾つかある。そのうち「エコシステム」や「生物多様性」といった言葉はボランティア・スタッフたちを含め養苗センター A の人々にとって最も基本的で且つ重要な活動の理念となってきた。しかし、これらの言葉は養苗センター A においてのみ注目されてきたものではない。オーストラリアにおける環境主義思想が成熟する過程で広く周知されるようになってきたのである。以下では、環境主義の高揚と共にエコシステムや生物多様性という概念がオーストラリアにおいてどのような文脈で使われてきたのかを、同国の環境主義運動において重要な役割を担ってきた「オーストラリア緑の党」を例にあげて整理しながら、養苗センター A の人々がこれらの概念をブッシュの自然と関わる中でどのように理解しているのか彼らの視点を分析していく。

前述のように、オーストラリアでは1960年代に環境主義への認識が高まり、ブッシュなどオーストラリアに独自の自然に注目が集まるようになる。オーストラリアにおける初期の環境主義運動にタスマニア州のペダー湖とその周辺の自然をめぐる運動がある。この運動に関わった運動家たちは1971年にタスマニア州を足がかりに政治活動を始めるようになった（前川2017: 88）。タスマニアから始まった彼らの政治活動は次第に全国的な知名度を得ようになり、後にオーストラリア緑の党へと組織化され連邦議会における存在感を増していった（前川2017: 88）。このオーストラリア緑の党の活動において長らく重要な概念とされてきたのが「エコシステム」や「生物多様性」である。例えば、2014年の連邦政府の国会審議においてオーストラリア緑の党の議員たちが熱心に主張したのは、イルカ、海鳥、アザラシなどの生物を含む海のエコシステムの保護である。それら議員たちは大型のトロール船の使用を禁止することでオーストラリアの周辺にある海の生物多様性を包括的に保護する必要性を説いた（前川2017:

87)。この主張は自由党の議員などから同国の漁業関係者の生活に多大な影響を及ぼしかねないと激しい反発を受け国会での討論は紛糾した。また、オーストラリア緑の党では、南極海周辺のエコシステムを保護するためにクジラからオキアミを含む周辺地域全体の保護を熱心に説いてきた。都市的な生活を象徴するビーチでの休日にクジラの群が登場するオーストラリアらしいランドスケープが、壮大な海のエコシステムと結び付けられ国会で熱弁が振るわれることもあった(前川 2017: 94)。そのために南極海における捕鯨活動は悪い行いと捉えられ徹底的に糾弾されてきた。理想とするオーストラリアの自然を達成するために生物多様性やエコシステムという概念が用いられ現在の社会的現状を大きく変革する必要性が叫ばれてきたのである。

一方でこのような環境主義に特徴的な思想には批判もあがっている。特に環境主義的な思想を過剰に追求するなかには、生物学的な意味での地球という大きな枠組みの中にすべてを組み込み、ある特定の地域で起きている社会的な現状や特定の人々の営みが生み出してきた歴史的な背景に蓋をして無効にしてしまう問題点がある(森岡 1996: 58; 前川 2017: 113)。そのため時には人間の生活よりも自然中心主義に傾倒することがある。要するに、生物学的な視点を軸に地球という大きな視座に立ち私たちの世界を見渡す思想は、時としてある現象が地球そのものにとって「良い」のか「悪い」のかという単純な二者択一へと話をすり替えてしまうのである。また、自然を人間よりも高次で崇高な存在と位置付けて理想化するロマン主義的な認識に依拠しがちとなることも挙げられている(森岡 1996: 62)。理想化されて語られる自然の保護は、人間の守るべき美德とされるか、あるいは集団的に共有するナショナルな価値観と結びつけられ、その主張の根拠を求める傾向がある(前川 2017: 93-94)。以下で紹介していくように、養苗センター A の人々もまたネイティブ・プランツに携わる仕事に従事するなかでオーストラリアの自然が晒されている様々な危機を敏感に受け止め、身の回りの自然について高い関心を持つ人々である。もちろん環境主義的な活動で頻繁に用いられる「エコシステム」や「生物多様性」といった言葉は養苗センター A の人々からも発せられる言葉であり、そういう意味においてオーストラリア緑の党と養苗センター A の人々を明確に差異化することはできない。しかし、養苗センター A のボランティア・スタッフたちは自然中心主義を急激に押し進めるため政治的な活動に身を投じるアクティビストではないし、また目の前で起きているブッシュの変化を「良いこと／悪いこと」の二者択一で判断しようとしているわけでもない。

例えば、筆者が火曜日のボランティア・スタッフたち7名が植え替え作業をしている最中に養苗センター A を訪ねた時のことである。それらスタッフたちは忙しく手を動かしながらもいつもの世間話をしていたので筆者も会話に加わった。最初はその頃のテレビで話題となっていた政治家の話などをしてしたが、そのうち筆者が養苗の作業に関する質問をし始めるとメルボルンの自然について話題が展開していった。その会話では、定年退職後の16年間をボランティア・スタッフとして活動してきた古参の男性 G 氏や主婦として三人の子供を育てる女性 J 氏が中心となりつつも、私を含めその場にいた火曜日のスタッフたち皆で、メルボルンという

特定の地域に生息する鳥など動物を呼び込むためにはどういふ自然が必要かということについて話した。それらスタッフたちは、そういった動物に住みかをあたえる自然を維持するためには外から持ち込んだ外来種ではなくネイティブ・プランツが不可欠になるのだと言う。オーストラリアではネイティブ・プランツの生育する豊かな自然が開発され、様々なネイティブ・プランツで構成されていた特徴的な自然が失われてしまった。その中には広大な土地がそのまま農場へと姿を変えた場所もある。自然を切り開いて木を引き抜いた後には、それまで生息していた動物が寄り付かないだけでなく、土壌そのものが痩せこけてしまうことをG氏やJ氏を含めボランティア・スタッフたちは危惧していた。G氏はそれを「全体のサイクルだ」と話した。その場で一緒に会話をしていたN氏は「エコシステム」という言葉を使い、ネイティブ・プランツが十分に育つからこそ、その土地ならではの環境が全体的に機能するようになるのだと言った。

その一方でN氏は、すでにメルボルンには良い状態のブッシュが多く残っていないことを示唆しながら、フレデリック・マカービンという画家が描いたようなブッシュはすでに開発され失われてしまったと話を続ける。ヨーロッパ系オーストラリア人にとってマカービンのブッシュはいつかどこかで目にしたことのある馴染みのあるランドスケープだ。N氏にとっても「これぞブッシュの自然」を描いた人物だという。彼女によるとマカービンはボックス・ヒルと呼ばれる地区の自然を多くの絵に残し、一部の人々にとってはアイデンティティとなるような自然を描いたと言う。G氏などその場にいた火曜日のスタッフたちも「ボックス・ヒル」という名前に反応し一斉に声をあげた。現在のボックス・ヒルは開発が進み、中国系の移民が多く住みついている。豚の丸焼きをガラス越しに吊るすような中国的な商店が駅前に立ち並ぶ。それらボランティア・スタッフたちによると、ボックス・ヒルが「まるで香港に来たみたい」になったのはここ20年ほどのことだと言う。N氏の言葉を聞いたボランティア・スタッフたちは、自分たちがよく知るマカービンのブッシュが、今では香港のようなボックス・ヒルになっていることを改めて確かめ合い口々に話した。その変貌ぶりが面白かったのか笑い声も出た。G氏は彼自身も1957年に移民としてヨーロッパからやって来たのだと話した。その場にいたスタッフたちは100年前のオーストラリアがロンドンと同じ人口であったことなどを振り返りながら、移民の流入によって人口が増加し続ける現在のオーストラリアの大きな発展ぶりについて話した。N氏がボックス・ヒルで買い物をして水餃子をたべるのが楽しいと話しながら、「私たちはただ変化していつているだけ」と付け加えると、他の人々も口々に頷いて同意した。養苗センターAの人々は、ネイティブ・プランツなどブッシュの自然が開発によって姿を消すことがオーストラリアのエコシステムにとって重大な問題であると認識しつつも、移民の流入や人口の増加による社会的変化を肯定も否定もしない、「ただ変化していつている」と判断をするのである。人間の現実と理想の自然の間で解消されることなく生じる変化を受け入れながら折り合いをつけようとする人々の様子が垣間見られた。

マネージャーである M 氏もまた人の流入によって変化してきたオーストラリアの自然へ目をむけながら周囲に広がるブッシュについて考えを巡らせてきた一人である。M 氏は近隣のコミュニティから声がかかるとネイティブ・プランツの植付けに関するコンサルタントを行っているが、彼自身はこういったコンサルタントを通してネイティブ・プランツを植える重要性をメルボルンの人々に「教えてまわる」ことを信条としており、その他のスタッフたちと同様に養苗センター A で働く意義を生物多様性やエコシステムにあるとみている。しかし一方で M 氏は生物多様性やエコシステムという言葉のみに還元することのできない人間と植物の複雑な関係性に自分たちが組み込まれていることを外から持ち込まれた植物を通して意識してもいた。すでに紹介したように 1970 年代を始まりとしてヴィクトリア州の政府はそれまでの方向を大きく転換し国外からやってきた植物の除草を推奨して、代わりにネイティブ・プランツの栽培を促すようになった。ネイティブ・プランツへの関心が高まる過程で、それまで人気の高かった植物は「外来種」あるいは「雑草」と認識されるようになり⁵⁾、ネイティブ・プランツに関わる活動をしている人々からは駆除の対象とされるようになったのである。ヴィクトリア州では市民たちのボランティアを募り、ネイティブ・プランツを脅かす外来種の駆除が積極的に行われた。一方で、現在の M 氏たち養苗センター A の人々は、海の向こうからやってきた外来種とオーストラリアに固有の在来種の対立的な構造を描いてオーストラリアの自然を明確な二分法をもとに分けようとしているわけではなかった。

オーストラリアには先述のロンドン・プレインと同様に外から持ち込まれて長らく市民権を得てきた人気の街路樹が多くある。代表的なものは、ブナ科のオーク、ニレ科のニレ、ノウゼンカズラ科のジャカラダ、ウルシ科のコショウボクなどである。これらは街路樹として人々に木陰を提供したり、学校の校庭で子供たちに親しまれたり、オーストラリアのあちこちに植えられてきた。時には街から少し離れたブッシュの中で見かけることもある。M 氏は職業柄これらの木々がオーストラリアの自然にとって異質な外来種であると認識しオーストラリアに独自のエコシステムを担う植物ではないと知ってはいるものの、直接的な対策をとることにはそれほど積極的ではない。M 氏はこれらの木々がある人々にとっては既に「ランドスケープの一部となっている」のだと考えている。そのランドスケープについて彼個人が「これは良い、これは悪い」と勝手な評価を下せないのだと言う。

「なぜならそれらの木々は長い時の中で既にランドスケープの一部となっている。人々はそれらの木々をネイティブ・プランツではないにもかかわらず、そうだと思っているのだよ。興味深いのは人々の植物に対する認識であり、それら木々がどのようにオーストラリアにたどり着いたのか時代によって変化していくということだ。そしてある時、ずっとネイティブ・プランツだと思っていた木が実はそうではなかったと気づくようになったりもする。これは良いか悪いかという問題ではない。私はこれについて何かをコメントするよ

うなことはしたくない。ただそれはそういうものだ、ということなんだ。」⁶⁾

M氏はさらに続けて、雑草とは実はとても「主観的な言葉であると同時に実際に起きている事実でもある」と語った。ある人にとっての雑草は他の誰かにとっては雑草ではないことがあるのだと言うM氏は、雑草に対して生物学的な認識を持つと共に観念的な認識も持ち合わせている。その上で彼は何を雑草とするかの難しさをさまざまな他者の視点を想像する過程で痛感しているようでもあった。先に紹介したように、人々の植物に対する認識の変遷を興味深いと語るM氏は、生物多様性の話をする中で次のようにも語っている。

「オーストラリアの植物にだけ関心をもってきたわけではなく、自分が関心を持ってきたのはもっと広く生物多様性に関連することだ…他の生き物たちと、植物の関係性、それは同時に人との関係性でもある」⁷⁾

この語りにはM氏がネイティブ・プランツのみを特別扱いしているわけではない意図が含まれると共に、現在のオーストラリアの自然を良いも悪いも作り出してきた人間および非人間を含む様々な行為者どうしの関係性が重要であることが示唆されている。特に、「人との関係性でもある」という部分にはオーストラリアの自然とその中に外来種を持ち込んだ移民たちとの関係性が意味されており、オーストラリアの入植史を暗示しているとも解釈できるだろう。ボックス・ヒルの話をしていたN氏の「ただ変化していつている」という言葉と共に考察するならば、ボランティア・スタッフたちは自分たちの生きる周囲の自然を生物学的な意味でのエコシステムとしてのみ捉えるのではなく、その他の様々な意図をもって行為し働きかける人間をも視野に入れている。それらの他者と繋がる空間の一部として自分たちの理想とする自然を捉えている視点が浮かびあがってくる。

(3) ネイティブ・プランツと複数の視点：その2 雑草

養苗センターAの人々は周囲のエコシステムに関わるなかで人間によってもたらされてきた変化に思いを巡らせてきた。時にはM氏のように雑草という人間ではないものが周囲に及ぼす影響について常に向き合っている。ここでは養苗センターAの人々のブッシュの自然に対する認識をさらに深めるべく彼らの考える雑草についてももう少し整理していきたい。

養苗センターAでは雑草のことを、「育った場所に属していない植物」あるいは「問題を起こす植物」とみなしている。彼らが言う「育った場所」というのは、その植物の生育地とみなされる場所のことを意味しており、また「問題を起こす」とはオーストラリアの自然に十分に適応しない植物のことを意味している。例えば先ほどのG氏が考える雑草とは、オーストラリアの厳しい乾燥に耐えられないヨーロッパやアメリカなどからやってきた外来種である。そ

れらは人が手をかけて大量の水を供給してやらねば生きられず、オーストラリアの自然環境には適していない。G氏の言葉を借りると、「そのままではいられない」植物のことだ。その他にもボランティア・スタッフたちによるとツバキなどが問題を起こす植物なのだという。ツバキはもともと多くのヨーロッパ系オーストラリア人の好む植物である。J氏によると彼女の母親もツバキが大のお気に入りであった。しかし、メルボルンの気候には適さないため育てるのに大変な労力を使い、約10年ごとに訪れる大干魃には必ず枯れてしまう。今では問題をすぐに起こすオーストラリアに適さない植物となった。またM氏は、地中海地域から持ち込まれたムラサキ科シャゼンムラサキ属の一年草であるサルベーション・ジェーン（パターソンズ・カース）⁸⁾ や、イネ科チカラシバ属の多年草であるファウンテイン・グラス（フォックスティール・グラス）⁹⁾ などを雑草にあげている。どちらも競争力の強い植物で非常に繁殖能力が高い。これらの植物の名前を口にする中でM氏が何度も強調したのは「独占する（take over）」という言葉であった。彼は「独占する」という言葉を使いながら、それらの植物が周囲の自然環境の中に一方的に入り込み、そのあたりを生育地としてきた植物を圧倒してしまうことで生物多様性が損われることを心配するのである。

オーストラリアでは入植が始まるとイギリスなどヨーロッパから様々な動植物が持ち込まれた。現在のオーストラリアのエコシステムは入植が始まった200年前と比べて大きく変化してきたと考えられている。例えば羊、牛、馬、豚などをヨーロッパから持ち込んで飼育し始めた畜産業によって、それまでアボリジナルの人々が手を入れ管理してきたネイティブ・プランツを中心とする自然環境に大きな変化がもたらされた（Pascoe 2014: 26）。ネイティブ・プランツが姿を消し始めるようになると、土が硬くなり雨を吸収せず川に水が溢れるようになって、更には草木の育ちにくい土地へと環境が急変し出したと言う（Pascoe 2014: 25-26, 33）。近年、これまでになく頻繁におこっている大規模な洪水や森林火災は、その一端であると認識され始めている。実際に一部の研究によると近年にみられるほどの大規模な森林火災はイギリスからの入植以前には殆どみられなかったことが報告されている（Pascoe 2014: 116）。養苗センターの人々は自分たちがネイティブ・プランツの養苗を行う重要性の一つを、この200年間の自然の変化に関連づけ考えているようであった。特に、養苗センターAのスタッフたちに共有されているのは、毎年のおこる洪水や森林火災に対する危機感である。オーストラリアにおいて「ブッシュ・ファイヤー」とよばれる大規模な森林火災は養苗センターAのスタッフのみならず、メルボルンの都市生活にも影響を及ぼすことから多くの人々にとって生命に関わる大きな危機であると認識されている。2009年1月にヴィクトリア州を中心におきたブッシュ・ファイヤーは歴史的にも稀にみる大規模な森林火災で、燃え盛る火の影響を受けメルボルンの中心部においても46度の気温を記録した¹⁰⁾。このブッシュ・ファイヤーはのちに「ブラック・サタデー」と呼ばれ、メルボルンを含めヴィクトリア州の人々に森林火災に対する恐怖の記憶として共通の集団意識を形成している。養苗センターAで働く人々の中には、まさにブラッ

ク・サタデーをきっかけに身の回りの自然について真剣に考え始めたという人もいる。例えば、ボランティア・スタッフとして2009年から養苗センターAに出入りしている男性は、ブラック・サタデーが起きたことを理由に養苗センターAの活動に参加するようになった人物である。彼はブラック・サタデーによる干魘で自宅の庭に植えていたほとんどの植物を失ったと言う。それらは男性のお気に入りのヨーロッパの植物たちであった。ヴィクトリア州ではブラック・サタデーによる森林火災で凡そ40ヘクタールの土地が焼失したが、その他にも46度にまで達するほどの猛暑となった。その森林火災が干魘を引き起こし、彼の庭の多くの植物を枯らしたというわけである。男性はブラック・サタデーをきっかけに周囲の自然環境に合わせた庭造りが必要であることを悟り、オーストラリアのランドスケープが元々どのような植物によって構成されてきたのか理解したいと思うようになった。その結果、オーストラリアの乾燥した季節にも強いネイティブ・プランツに目を向けるようになったのである。現在の男性の庭は、2割が昔から庭に植えているヨーロッパの植物で構成されおり、残りの8割は養苗センターAで育て方を学んだネイティブ・プランツに植え替えられている。M氏やG氏など古参のスタッフたちはブラック・サタデーが起きる以前よりオーストラリアの変化する自然について関心が高かった人ではあるが、その他の養苗センターAの人々にとっても生物多様性への関心にはブラック・サタデーのような未曾有の自然災害に対する危機感がある。入植開始以降に外からやってきた動植物によって数を減らしつつあるネイティブ・プランツの重要性を再認識し、オーストラリアの自然に適した様々な種類のネイティブ・プランツを中心とした自然環境への注目が高まっているのである。

ところで、養苗センターAの人々が意味する雑草は必ずしも海の向こうからやってきた植物に限らない。先述のとおり、オーストラリアにおいて一般の人々の間で広くネイティブ・プランツの重要性が意識され始めたのが1970年代のことである。養苗センターAの人々によると、その当時のオーストラリアでネイティブ・プランツの活動に関わっていた人々は「オーストラリアの植物ならば手当たり次第どこにでもなんでも植えていた」。しかし、現在の養苗センターAで最も注意を払う作業の一つが、手当たり次第にどこにでもなんでも植えないためのネイティブ・プランツの選定と採取である。例えば、M氏との会話で話題となった植物にワットルと呼ばれるネイティブ・プランツがある。ワットルはオーストラリアの国花でもあり同国を代表するマメ科アカシア属のネイティブ・プランツだ。国内において約1000種が見つかっており、それぞれのワットルには地域的な特色がある。例えばシドニー・ゴールドデン・ワットルはニューサウス・ウェールズ州の海岸地域に固有のワットルであるが現在では様々な州で繁殖が確認されている。このネイティブ・プランツは鑑賞用の目的で人の手により運ばれオーストラリアを東から西へと横断した。現在はヴィクトリア州を含む他の州で地域固有の植物の生育地を奪うことから雑草の認定を受けている¹¹⁾。また同じくシャロウ・ワットルもニューサウス・ウェールズ州の海岸地域に固有のワットルであったが、鑑賞用の目的で入植期

の始めにオーストラリアの各地へと持ち込まれた¹²⁾。このシャロウ・ワットルもヴィクトリア州では雑草と見なされ、その侵入力の高さが懸念されている¹³⁾。養苗センター A ではこれらオーストラリアの各地域で固有種とされるネイティブ・プランツであっても、メルボルンのエコシステムを乱す植物であるとしてメルボルンに固有の植物とは区別している。特に養苗の全てを任されている N 氏をリーダーとしたボランティア・スタッフたちは、「ネイティブ・プランツ」と「インディジナス・プランツ」という 2 つの言葉を用いて、M 氏の考える「雑草」という言葉をより厳密に認識しながら植物の選定と採取を行う実働部隊である。N 氏たちによると、「ネイティブ・プランツ」とはオーストラリアに固有の植物を意味し、「インディジナス・プランツ」はオーストラリアの中でも特定の地域に固有の植物のことを指す。すでに養苗センター A のある森林地区ではさまざまな地域から持ち込まれたネイティブ・プランツが混在しているのだが、N 氏を先頭としたボランティア・スタッフたちは定期的に森林地区内を歩き回り、メルボルンに特有とされるインディジナス・プランツを集めては種を採取している。彼らはインディジナス・プランツに詳しい N 氏を中心にメルボルンに固有の植物かを見分けながら、センターで養苗すべきメルボルンの植物を選別しているのだ(前川 2020: 59)。N 氏はそれを「シークレット・ガーデン」と独自の言葉で表現する。そして N 氏は、養苗センター A においてインディジナス・プランツのみにこだわって植物の選別と養苗を行うのは、メルボルンでのみ感じることができ自然を維持することにあるのだと言った。つまりオーストラリアの他のどの場所でもないメルボルンだけに存在する「シークレット・ガーデン」を感じることで自然の維持を目的としているわけである。

このように養苗センター A において雑草とされるのは海の向こうからやってきた植物だけでなく、メルボルンという土地に何かのきっかけで入って来た植物も含まれる。特に、人の能動的な活動によって持ち込まれたという意味合いが多分に含まれている。そう言う意味でメルボルンという土地の外から人の活動と一緒に能動的にやって来た植物は、それがたとえオーストラリアの固有種でシドニーの周辺では在来種となっているネイティブ・プランツであっても外来種の雑草ということになる¹⁴⁾。ワットルのような植物であっても外からやって来て一方的にメルボルンの環境を独占してしまう侵入力の高い植物は、それがネイティブ・プランツであろうともメルボルンの自然に能動的に働きかける異質な行為者と見なされるのだ。そういうわけで養苗センター A では、N 氏の指示のもとメルボルンという特定の地域に属するインディジナス・プランツのみを、周囲の自然の一部となって生物多様性を機能させる植物と見なし、養苗と販売の対象としているのである。サーウォンからの先行研究で紹介したネイティブ・プランツをめぐる動きには、オーストラリアらしいアイデンティティの模索のためにネイティブ・プランツへと脚光が当たる様子が批判的に考察されていた。そこにはネイションとしてのオーストラリアをネイティブ・プランツから創造しようとするヨーロッパ系オーストラリア人の姿が浮かび上がってくる。一方で、現在の養苗センター A の活動から見えてくるのはオー

ストラリアという大きな枠組みにおけるアイデンティティの模索ではなく、もっとローカルなメルボルンの自然に注目しようとする様子である¹⁵⁾。

海外からやってきた外来種の一部が人々に馴染みのランドスケープを作り出していると言う前節の M 氏の語りは、すでに外から入ってきて生活の中に溶け込んでいる外来種に対する両義的なあり方を示している。彼の考える生物多様性は外来の植物が既にオーストラリアへ入って来たという現状を受け入れつつ、同時にネイティブ・プランツの養苗を達成しようという矛盾した姿を映し出している。特に、長い時間の経過の中で他者の心象心理に馴染みあるものと認識されている植物の是非を問えないと言う M 氏の語りには、行為者としての人間および植物のときほぐすことが難しい複雑なネットワークが既に生み出されているために、彼がそれら外からやってきた植物をオーストラリアの自然に一方的に働きかけるだけの能動的な行為者として位置付けきれていない様子を示唆しているのではないだろうか。つまり M 氏は、それら植物が能動的な行為者「である」のか「でないのか」どちらとも分類することのできないあり方に自分では明確な判断を下すことができず¹⁶⁾、前節で彼が語るように「ただそれはそういうものだ」とだけ付け加えるのだった。M 氏の「ただそれはそういうものだ」という語りには、様々な行為者によって長い時間をかけて生み出されしてきた複雑なネットワークを彼個人がどうすることもできないという認識が含まれているのである。このことを踏まえ考察されるのは M 氏の自然に対する認識が、その自然が「能動的に変化するもの」であるのか「受動的にそこにあるもの」であるのかという二項を軸にできているということである。そういうわけで M 氏にとってサルベーション・ジェーンなどのような独占的且つ侵入性が高い外来種もまた、人の移動と共に入ってきて周囲の自然へ介入する、つまり能動的にオーストラリアの自然へと働きかける行為者であり、彼はそれを好ましいものとは考えない。また、ワットルの場合はどうであろうか。ワットルはオーストラリアの代表的な植物であり、一般の人々にとってはメルボルンに固有のワットルであろうが、シドニーに固有のワットルであろうが、おそらく区別することはできない。シドニーのワットルがメルボルンに群生していたとしても、メルボルンに暮らす人々はそれらを自分たちの生活に溶け込んだ見慣れた植物とみなしているだろう。そのワットルにサルベーション・ジェーンと同じような能動性をみるのは、N 氏が言うところの「シークレット・ガーデン」としてのメルボルンを感じさせる自然をシドニーのワットルでは維持できないからである。M 氏や N 氏および彼らの指導をうける養苗センター A の人々にとって、人の能動的な移動と共にやって来た植物はたとえ同国を代表するワットルであっても好ましいものではないのだ。そういう意味において、養苗センター A で活動する人々が目指しているのは、人の移動が激しくなる前の「ありし日のメルボルン」を再現することと言えるのではないだろうか。その再現こそがメルボルンを感じさせる「シークレット・ガーデン」なのかもしれない。以上のように考察してくると、M 氏や N 氏を始め養苗センター A で活動する人々はネイティブ・プランツに関わる中で、人間の移動、それも入植が進む中でもたらされるように

なった人間および植物の能動的な移動や転移を敏感に感じとりながら活動を行っている。

(4) ネイティブ・プランツと複数の視点：その3 テラノレジウス

人間および自然に関する移動や転移をめくりもう一つ整理しておきたい点がある。上記の「ありし日のメルボルン」とも関連する点である。それは養苗センター A の人々とアボリジナルの人々との関係性である。養苗センター A のボランティア・スタッフと話して気づくのは、それらの人々のインディジナス・プランツへの高い関心である。それらスタッフたちがインディジナス・プランツの養苗に力を注いでいるのは、先ほどの N 氏の言葉にあるようなメルボルンにしかない「シークレット・ガーデン」を感じさせる生物多様性を守るためである。特にブッシュ・ファイヤーなど年々の気候変動で悪化する自然について、どの人も自らの身に迫る強い危機感を感じている。そういう中であって彼らが関心の目を向けるもう一つが、長らくネイティブ・プランツを様々な活用してきたアボリジナルの人々の自然との関わりである。養苗センター A の人々がアボリジナルのネイティブ・プランツに関する知識に関心を示しているのだということを知ったのは、筆者が2017年に初めて養苗センター A を訪ねた時であった。養苗センター A の裏手にある養苗床の水撒きを見て回っているときに、「ナレッジ・シェアリング」という言葉を使って話す様子に出くわしたのである。その「ナレッジ・シェアリング」の意味を尋ねると、ネイティブ・プランツなどブッシュの自然に関して知ることはアボリジナルの人々が持っている知識に触れることでもあり、それは「ナレッジ・シェアリング」なのではないかと言うことだった。以下、本節ではネイティブ・プランツをめぐる養苗センター A の活動がアボリジナルの人々への関心と結びつくものであることを明らかにしながら、植民地主義を経験したオーストラリアにおいて被抑圧者の持つ知識への興味が、どのような視点への接続を可能および不可能としているのか考察していきたい。まずは養苗センター A の人々がアボリジナルの人々と如何なる接点をもつものか整理していく。

養苗センター A の人々は筆者が現在までに確認するところではアボリジナル・コミュニティとの直接的な繋がりを持っていない。メルボルンなどの都市に住む一般的なヨーロッパ系オーストラリア人にとってアボリジナルの人々は身近な近隣の住民というわけではないのである。もちろんメルボルンには様々なアボリジナル・コミュニティが存在する。例えば、CBDに近いフィッツロイと呼ばれる地区は1920年代ごろからアボリジナルの人々が集まりコミュニティができていた¹⁷⁾。現在でもフィッツロイの他にメルボルンにはアボリジナルの人々の交流の場となっているフットボール・クラブ¹⁸⁾やアボリジナルの人々のためにヘルス・サーヴィスを提供する施設がある。しかし実際には、養苗センター A の人々にみられるように多くのヨーロッパ系オーストラリア人たちにとってアボリジナルの人々と日常的に接触する機会が少ない。これには様々な理由が存在するが、第一にオーストラリアという社会の構造的な分断と切り離して考えることはできないだろう。2008年に首相となったケヴィン・ラッドは就

任直後に同国歴代首相として初めてアボリジナルの人々への政府による公式な謝罪を発表した。ラッドは其中で先住民社会と非先住民社会の間に存在する分断が未だ解消されていない現実に言及している (Altman and Fogarty 2010: 110-111)。実際に、先住民社会と非先住民社会の分断は日常生活の様々な領域にまで及んでいる。例えば、アボリジナルの人々の平均寿命はそれ以外のオーストラリア人と比較すると17年も短いという統計が出されている (Altman and Fogarty 2010: 111)。また経済面においても、オーストラリアで最も低所得とされる20%の層に、アボリジナルの全人口中48%の人々が入っている (Langton and Rhea 2009: 97)。このような構造的な分断が解消されないオーストラリアにあっては、かねてより政府が掲げるアボリジナル・コミュニティとの「和解」などほぼ不可能に等しい。社会的な活躍の場を長年の構造的な分断により奪われているアボリジナルの人々にとって、その他のオーストラリア人たちと共に社会的な活動に加わることや、日常的に生活の場を共にすることがどのように難しいことであるのか想像に容易い。

このようなオーストラリアの社会的分断からブッシュの自然について鋭い考察を加えているのがトム・グリフィスである。グリフィスは歴史学の視点からヨーロッパからやってきた入植者たちがオーストラリアの自然へと介入する様子を考察し、入植者たちがアボリジナルの人々が持つような土地への帰属を手にする不可能性について論じている。もともとヨーロッパからの初期入植者にとってオーストラリアの自然は必ずしも好意的なものではなかった。国民的作家であるヘンリー・ローソンが19世紀後半に描き出したように、ブッシュは労働者に過酷な重労働を強いる克服されない厳しい自然環境であったのだ。ところが20世紀にもなると、ブッシュの自然へ好意的な関心を示すヨーロッパ系オーストラリア人たちも現れるようになる。オーストラリアの自然に積極的な関心をむける団体や運動が生まれ、オーストラリアという土地とヨーロッパ系オーストラリア人たちとの繋がりに注目が集まるようになっていった。メルボルンでは「ヒストリカル・ソサイエティ・オブ・ヴィクトリア」と名付けられた組織が作られ、1910年から1930年の間に百を超える数の石碑や彫像が建てられている。それらは入植期の探検家たちが行ったブッシュへの旅を広く紹介するために建立されたものであり、その土地がどのように開拓されたのかという入植の歴史を刻むものであった (Griffiths, 158)。そのような活動を熱心におこなっていたうちの一人にボブ・クロールという人物がいる。メルボルンでオーストラリア内陸部の自然を紹介する活動をしていたクロールは、当時まだ入植者たちの手がそれほど及んでいなかったオーストラリア大陸内陸部へ強い関心をもった。彼は1929年を皮切りに当時まだ困難であった大陸内陸部への探検を6度も敢行している。そのクロールは探検を繰り返すなかで自身のオーストラリアに対する愛着を深め、死際に「自らの生まれ故郷である土地への愛はなんとも深いものであろうか、そういう意味で私は一人のアボリジナルである」と書き残している (Griffiths 2009: 175)¹⁹⁾。グリフィスはクロールに代表されるような人々が、本来ならば持たないはずのオーストラリアとの繋がりをブッシュなど自然への巡礼を通し

て意図的に「創造」していったことを批判的に分析する²⁰⁾。そしてヨーロッパ系オーストラリア人たちが植民地主義の暴力的介入を隠蔽したまま、オーストラリアという土地と生まれながらに情緒的関係性を築いているという自分たちの土着性を強調するためブッシュの自然が利用されてきたのだと強く糾弾するのである (Griffiths 2009: 173)。

養苗センター A の人々もまたイギリスの植民地主義に始まる土地収奪の延長線上に生きる人々である。グリフィスが議論するように彼ら養苗センター A の人々も、本来ならば持たないはずの土地との情緒的関係性を創造するために活動を続けていると考察することができるかもしれない。一方で、既に別稿でも紹介したように、養苗センター A の人々はネイティブ・プランツに関わる活動を通して、入植地としてのオーストラリアがどのように開拓されてきた土地であるのか再帰的に目を向ける視点をもちあわせてもいた (前川 2020)。その再帰的考察の一つのきっかけとなったのが、彼らがアボリジナルの伝統的な農業を知る機会を得たことにある。N氏が「いま私たちがここでやっているような方法ではないけれど、彼らはもう一つ別の土地管理のスタイルをもっていた」と言うように、ネイティブ・プランツを含めオーストラリアの自然に対して関心の高い養苗センター A の人々は、自分たちとは異なる方法でネイティブ・プランツを活用していたアボリジナルの農業について興味を持つ人が多い。前節でも登場した古参のボランティア・スタッフ G氏は、狩猟採集民と思われがちなアボリジナルの人々がずっと昔から農業をおこなってきた人々で、彼らがネイティブ・プランツを様々な活用してきた歴史的事実に詳しい。G氏はアボリジナルの農業が発展するなかで育てられてきたネイティブ・プランツについて語り、そのうちの多くが入植以降に畜産業が展開していくなかで消えてしまったことなどを話す。そのG氏は「テラヌリウス (terra nullius) という言葉を知っているか?」と筆者に問いかけてきた。テラヌリウスとはイギリスがオーストラリアへ入植する際に用いた言葉である。所有者のいない土地のことを意味する。イギリスの植民地主義は、既に幾つものアボリジナル諸集団によって伝統的に管理されてきたオーストラリアを、「誰も所有していない土地」と一方的に宣言することで正当化されてきたのである。入植者による牛の放牧もテラヌリウスを前提に成立してきたというわけだ。G氏はこのテラヌリウスという言葉を使いながらオーストラリアというアボリジナルの土地がヨーロッパの入植者によって「奪われた土地」であることを強く強調した。G氏よりもさらに直接的な言葉を用いるのはN氏である。彼女は「インヴェイダー」という言葉を口にしながら、アボリジナルの人々が伝統的に管理してきた土地の崩壊やネイティブ・プランツの減少を植民地主義の問題として強く認識している。G氏やN氏および会話に参加していた養苗センター A の人々はアボリジナルの人々がどのようにネイティブ・プランツを活用してきたのかを知る過程で、現在の自分たちが活動を行う同じ土地が植民地主義的な暴力によって他者から取り上げた土地であることを常に突き付けられている。養苗センター A の人々の語りからわかるのは、そもそもオーストラリアが入植者たちにとって不可能性を前提として存在している土地であり、自分たちの活動がその上に

成り立っていることである。これら養苗センター A の人々をグリフィスが批判の矛先を向けてきた「アボリジナルである」ことを可能だと前提付けてきたクロールらと混同することはできないだろう。

ところで、アボリジナル・コミュニティとの直接的な関係をもたない養苗センター A の人々が、アボリジナルの伝統的農業およびアボリジナルの人々が利用してきたネイティブ・プランツに関する情報を如何なる手段で得ているのか説明しておきたい。先述のとおり養苗センター A の人々は直接的な関係をもたないわけであるから、その接触は間接的なものに頼らざるを得ない。ブルース・パスコーにより 2014 年に出版された『ダーク・エミュ』はその間接的な媒体の一つである。アボリジナルに出自的背景を持つパスコーは、狩猟採集によってのみ生活を営んでいたと思われてきたアボリジナルの諸集団が、土地を耕作しネイティブ・プランツであるヤマイモの一種を活用して畑を開墾していたこと、また川や池を使い魚の養殖をおこなっていたことを通して明らかにしてきた。またパスコーはシドニーで収録された世界的に有名な教養番組『TED × Sydney』²¹⁾にも登壇するなど執筆以外の活動も精力的にこなし、イギリス軍の探検調査隊が目にした水平線まで続く耕作地などアボリジナルの農業について紹介している。しかし、パスコーが紐解くのはアボリジナル社会がネイティブ・プランツを駆使して農業を行っていたという事実だけではない。パスコーが明らかにしたのは、アボリジナル・コミュニティの土地との関係性を語るために軍将校が残した資料など入植者が書き記した記述を探し回らなければならなかったことや、そこまで入念に資料を揃えても殆どの出版社に門前払いされた経験である。彼のようなアボリジナルに出自を持つ無名の作家がオーストラリアの既存の正史に挑戦することが如何に荒唐無稽な夢物語であったのか、そして自分たちアボリジナル・コミュニティの歴史について語るときに西洋的な語りの枠組みの中でしかそれを証明しえない現実である。パスコーは彼の少年時代には全く見向きもされてこなかった為に埋もれたままになっていたアボリジナル・コミュニティと土地の関係性を明らかにするため『ダーク・エミュ』の執筆に尽力したのだと言う (Allam 2019)。オーストラリア版の『ザ・ガーディアン』²²⁾紙はパスコーの著作によって明らかにされた事実がオーストラリアの「歴史を書き直した」と評している (Allam 2019)。このようなパスコーの活動がアボリジナル・コミュニティとは直接的な接点をもたない養苗センター A の人々の目にとまり彼らの愛読書となったわけである。

オーストラリアでは入植者としてのヨーロッパ系オーストラリア人の帰属の問題が長らく議論されてきた。マボ判決などを経てアボリジナルの人々の土地権が西洋的な観点からも法的に根拠あるものとみなされるようになると、ヨーロッパ系オーストラリア人たちの間で信じられてきた「わたしたちのオーストラリア」が揺らぎ始めたのである。その問題に頭を悩ませてきた一人にピーター・リードがいる。リードは 1970 年代にアボリジナル保護局について調査をしていた。その調査時に行政がアボリジナル・コミュニティで暮らす「混血児」たちを親元か

ら強制的に奪い去ってきた事実を知った。親元から引き離された「混血児」たちは教会施設などで西洋的価値観を教え込まれ男女ともに労働力として搾取されてきた。リードが見つけたのは、この行政主導の政策が19世紀末から彼の時代まで続いていたことを明らかにする資料であった。リードはそれを「盗まれた世代」と名付け世に知らしめた研究者である²³⁾。そのリードは自身の著作である『帰属』において、伝統的な土地所有者であるアボリジナルの人々から暴力的に土地を奪いオーストラリアに対して正当な帰属性を持たない彼自身を含む「ホワイト・オーストラリアン」とは、同国にとって如何なる存在なのかと模索する。そしてリードは、その答えを「土地への愛着」に見出している。リードは「ホワイト・オーストラリアン」のオーストラリアへの帰属の在り処を、アボリジナルに出自的背景を持つ友人のデニス・フォーレイとの対話から見つけ出そうとする。シドニーを同じ故郷とする二人の記憶や経験が完全に重なり合うものではないことを前提としつつも、同じ土地に愛着を持つ者として互いが互いの「影の兄弟」となり共存しうる可能性を見出すのである(Read 2000: 6-29)。このようなリードの『帰属』に対してアボリジナルに出自的背景のある研究者のアイリーン・モートン＝ロビンソンは厳しい批判を投げかけている。モートン＝ロビンソンはリードのようにパートナーシップを結べる同等の存在として両者をみなすこと自体がそもそも不可能な問いかけであると言うのだ。モートン＝ロビンソンはテラスリウスから始まる強制的な収奪と転移の歴史が未だ解決しないオーストラリアに同等なパートナーシップなど成立しえないことを痛烈に批判する(Moretton-Robinson 2003: 27)。コリン・サルターもまたモートン＝ロビンソンの議論を踏襲しながらリードの『帰属』に対して懐疑的な立場をとっている。サルターはモートン＝ロビンソンの「テラノレジウス (terra knowlegius)」という言葉を用いて、他者の知識を自由に流用すること自体が特権的なホワイトネスであることを指摘する(Salter 2013: 70, 205)。「テラノレジウス (terra knowlegius)」とはモートン＝ロビンソンが「テラスリウス」から着想を得た言葉であるが、この言葉が意味するところはヨーロッパ系オーストラリア人、つまりオーストラリアにおいて「ホワイトネス」を体現しうる人々が、入植地としてのオーストラリアを占有するのみならず、アボリジナルの人々の土地に関する知識や記憶さえも自由に占有することを意味している(Salter 2013: 17)。サルターがモートン＝ロビンソンのテラノレジウスを用いながら論ずるところでは、リードが『帰属』の中で導き出した答えはつまるところ、ホワイト・オーストラリアンのオーストラリアに対する帰属の正当性を、影の兄弟となったアボリジナルの人々との融和に見出すことで、その融和からオーストラリアに帰属する正当なアボリジナリティを獲得しようとするものである。しかしそのアボリジナリティの獲得が許されオーストラリアへの帰属の道が開かれるのは、まさにホワイトネスの持つ特権をリードが有しているからだと言う。アボリジナルの人々が土地との間に築いてきた記憶や経験から生み出されるアボリジナリティ、そのアボリジナリティを融和という言葉を用いて都合よく自由に取り出して利用できるのはホワイト・オーストラリアンだからである(Salter 2013: 205)。一方のアボリジナル

の人々にとってホワイト・オーストラリアンの経験や知識を自由に取り出して利用することは長らく阻まれてきた (Salter 2013: 205)。

養苗センター A の人々がパスコーなどから得たブッシュの自然に関する知識は、確かに簡単に共有できると勘違いして良いようなものではない。アイリーン・モートン＝ロビンソンらの議論にもあるように、養苗センター A で聞いた「ナレッジ・シェアリング」はそもそも不平等を背景にした現在のオーストラリアでは、どのような理由をつけようとも単なるテラノレジウスにすぎない。一方で養苗センター A の人々のアボリジナルの農業を含めたネイティブ・プランツへの関心は、自分たちの活動が植民地主義という不可能性の上に位置付けられるものであることを常に喚起させてもいる。もちろん「テラヌリウス」や「インヴェイダー」という言葉を使ったからと言ってアボリジナルの人々とのナレッジ・シェアリングが許されるわけではない。ただ養苗センター A の人々は、ありし日のメルボルンを再現すべくエコシステムなど生物学的な意味でのブッシュの自然を理解すると同時に、自分たちの活動の対象となる自然をめぐる他者の歴史に間接的に触れる。その間接的に触れた歴史を知る中で養苗センター A の人々が学ぶのは、抑圧者としての自己と被抑圧者としての他者の統合されることの無い不可能性である。オーストラリアのブッシュという自然を媒介項に立場の異なる行為者との答えの出ない関係性の中に良くも悪くも身を置く人々の様子が伺える。

4. むすびに

本論はブッシュの自然に関わる活動がヨーロッパ系オーストラリア人たちのネイションに対する愛着と深く結びついているという先行研究の議論を踏襲する一方で、ナショナリズムの枠組みの中で一辺倒に語られがちな議論を別の角度から考察するものでもある。特に、養苗センター A における人々の活動から、ネイティブ・プランツという人間ではないものとの関わりがオーストラリアの社会内部における複雑な繋がりを呼び起こし、人々の行動に影響を与える様子を明らかにしてきた。

科学人類学者のブルーノ・ラトゥールによると人の行為は周囲に存在するあらゆる人間および非人間との関わりの中でつくられていく (ラトゥール 2007: 223-275)。例えばラトゥールは科学を人類学的に考察した著作の中で、「手にした銃によってあなたが変わるように、銃もあなたに持たれることで変わる」と論じる (ラトゥール 2007: 230)。銃という所有物を得たあなたは、その所有物を使用するときに生まれる新しい関係性の中に組み込まれてゆき、それまでのあなたとは違う主体へと変更される。更に、あなたに所有された銃は、あなたという新しい主体との間に関係を持つようになり、あなたが巻き起こす一連の出来事の中に登場して様々な行為を生み出していく。このようにラトゥールは、本来ならば「主体／客体」という二項に分断されがちな出来事の発生を、人間および非人間を含む複雑なネットワークの中に置き直し、あ

らゆるものが互いに作用を受けながら、その発生に関係していることを論じた（ラトゥール 2007: 231）。本論ではラトゥールの難解な科学論を深掘りするつもりはないが、彼の議論をネイティブ・プランツの活動に従事する養苗センター A に応用するならば、ネイティブ・プランツを含むブッシュの自然もまた、人の生活に作用を及ぼす行為者であると言えるし、養苗センター A における活動はあらゆる行為者から作用を受けて成立していると考えられるだろう。

ブッシュの自然は人と人を繋ぐ媒介項となって養苗センター A の人々に働きかける。それは時に多くの人命を奪う脅威のブッシュ・ファイヤーとなって立ち現れ、ある人にネイティブ・プランツへと目をむけるきっかけを与える。また、M氏が他の人々にとって既にランドスケープの一部だと言うような外来の植物たちは、強烈な存在感を放って彼の意識に影響を及ぼす。その一方で、人の活動に伴って移動しメルボルンの自然へと積極的に作用を及ぼそうとする在来の植物は、その能動性の高さゆえに危険な行為者とみなされ排除の対象となる。さらに養苗センター A の人々は自分たちが熱心に働きかける自然が、どのような収奪と転移の上に成り立っているのかを、ネイティブ・プランツを媒介にして眼差す。入植者という植民地的な存在の延長線上に位置付けられる養苗センター A の人々にとって、ネイティブ・プランツなどを含むオーストラリアの自然は、自分たちを拒み不可能性を突きつける強力な行為者となる。

養苗センター A の人々がオーストラリアで起きている様々な人間および非人間のネットワークに日常的に触れている姿を整理し浮かび上がってきたのは、それらの行為者たちの間に横たわる統一されることのできない現実である。それら様々な行為者が引き起こす関係性のなかに身を置く養苗センター A の人々は、移民と共にオーストラリアの自然を見つめ、ネイティブ・プランツを通して部分的にアボリジナルの人々について知り、外来種と在来種の攻防からメルボルンの自然について考える。養苗センター A における活動から浮かび上がるのは、ナショナル・アイデンティティという同一性への希求に回収することのできない、異なる視点で構成された統合されない空間に暮らす人々の姿である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり吉岡政徳先生に貴重なコメントをいただきました。2017年にネイティブ・プランツに関する調査を始めた頃より、労を厭わず幾度もご助言を賜りました。ここに記して感謝を申し上げます。また本研究は2018年度より交付されました科学研究費助成事業の若手研究によって受けました助成金をもとにフィールド調査を行ったものであり、学術的な知の蓄積に少しでも貢献できましたことに感謝申し上げます。最後に、ラトゥールなどを共に読んでくださいました読書仲間の皆様方にもお礼を申し上げます。



写真① 川の流れる森林地区



写真② 養苗センター A の作業場で新しいポットに移し替えられて



写真③ 養苗センター A の養苗場ですくすく成長中

注

- 1) 本論で焦点をあてる人々はオーストラリアにおけるマジョリティ住民である。それらの人々は長らくアングロ・ケルティック系オーストラリア人と呼ばれてきた。近年ではアングロ・ヨーロッパ系と呼ばれることもある。本論ではそれらの人々を総称して「ヨーロッパ系オーストラリア人」とする。
- 2) こういったブッシュの自然をめぐる一連の動きは「ネイティブ・ガーデン運動」と呼ばれている。すでに整理してきたように同運動には特定の指導者がいたわけでもなく、また運動の契機となるようなデモ活動が行われたわけでもない。サーウォンカが指摘するところではネイティブ・ガーデン運動とはブッシュの自然の再評価をめぐるディスコースである。また、ネイティブ・プランツへの注目がより広く一般の人々の注目を集めるようになったのが1970年代のことである。
- 3) さまざまに討論がマスメディアを巻き込みながらおこなわれた結果、最終的にはスワンストーン通りにはロンドン・プレインが植えられることになった。
- 4) 本論では、エコシステムという言葉が養苗センター A の人々の間で周囲の環境を全体的に説明するときに頻りに用いられることから、広く自然を表すときに用いられる言葉と解釈している。一方で、生物多様性は自然を表すときに用いられることもあるが、どちらかと言うと多様な植物の種が共存していることを表すときに用いられることが多い。本論ではこれらのことに留意しつつ、養苗センター A の人々が話す文脈に適した解釈となるよう注意を払っている。
- 5) 特に近年では外来種の中でもネイティブ・プランツの生育地を奪う繁殖力の強い外来種を「国家的に最重要な雑草 (Weeds of National Significance=WONS)」と呼んで積極的な管理および駆除の対象としている。この WONS の対象とされているのは、アメリカなどを原産地とするユビ科のアリゲーター・ウィード、南アフリカを原産地とするキク科のボーンシードなどである。
- 6) M 氏の実際の語りは次を参照のこと。'Because it has been part of landscape so long, people think it's native plants, but they're not. It's interesting people's perceptions how they arrive and how they change overtime as well, and more and more people realise they are not native plants we always thought they were. It's not good or bad thing, I'm not making comment either way but it is what it is'.
- 7) M 氏の実際の語りは次を参照のこと。'Not just look at Australian plants, but it's just, it's more about connection to biodiversity, other animals, their relationship with plants, but also there is relationships with people too'.
- 8) パサーソンズ・コースに関しては各州政府からも雑草として詳細な情報が発信されている。〈https://data.environment.sa.gov.au/Content/Publications/pests_salvation_jane.pdf〉 (accessed on May 21, 2020) および 〈<http://agriculture.vic.gov.au/agriculture/pests-diseases-and-weeds/weeds/a-z-of-weeds/patersons-curse>〉 (accessed on May 21, 2020) を参照のこと。
- 9) ファウンテン・グラスの仲間は海外から持ち込まれたものもあるが、その一部は NSW や Qld の固有種が存在する。次の URL を参照のこと。〈http://www.aabr.org.au/images/stories/resources/ManagementGuides/WeedGuides/wmg_pennisetum.pdf〉 (accessed on May 21, 2020)。〈http://vro.agriculture.vic.gov.au/dpi/vro/vrosite.nsf/pages/weeds_swamp-foxtails-grass〉 (accessed on May 21, 2020)。
- 10) 2009年1月にヴィクトリア州を中心におきたブッシュ・ファイヤーは歴史的にも稀にみる大規模な森林火災で、メルボルンでは3日連続43度の気温を記録した。2月7日には46度にまで達している。当時、筆者はメルボルンのCBDに近いカールトンという地区に住んでいたが、46度にまで気温が上昇した日は朝から非常に強い熱風が街に吹きつけ、その熱風が家の中にまで入り込み通常とは異なる状況に少なからず恐怖を感じたことを覚えている。ヴィクトリア州による報告では2月7日の死者は173人にのぼり、それに先立つ1月の森林火災では家屋2133棟が焼け、失われた土地は40万ヘクタールとなっていることをロイヤル・コミッション・ヴィクトリアが最終報告をしている。このブッシュ・ファイヤーはのちに「ブラック・サタデー」と呼ばれるようになった。次の URL を参照のこと。〈https://www.cfa.vic.gov.au/documents/20143/202133/royal_commission_implementation_

- plan.pdf/fbe16664-6aad-985f-0964-b1b922b58384) (accessed on May 21, 2020) および <<https://www.abc.net.au/news/2010-07-31/final-report-into-black-saturday-released/926484>> (accessed on May 21, 2020) .
- 11) 雑草としてのワットルに関しては次を参照のこと。<<http://www.bunbury.wa.gov.au/pdf/environment/weedy%20wattle%20fact%20sheet.pdf>> (accessed on May 21, 2020) .
 - 12) 雑草としてのワットルに関しては次を参照のこと。<<https://www.platypus.org.au/wp-content/uploads/2017/06/sallow-wattle-leaflet.pdf>> (accessed on May 21, 2020) .
 - 13) その他、先述した繁殖力の強いイネ科のファウンテン・グラスも、その一部がニューサウス・ウェールズ州やクィーンズランド州でネイティブ・プランツとなるものもあるが、メルボルンのあるヴィクトリア州では雑草になる植物である。
 - 14) 『最新日本の外来生物』 自然環境研究センター編 (平凡社) 2019 年によると、日本では国内の在来種ではあるが本来は分布していない地域で繁殖している生物に関して「国内由来の外来種」という言葉を用いて表現している (p.483)。「国内由来の外来種」は「国外由来の外来種」と共に周囲の環境への影響が懸念されている (p.483)。
 - 15) このような試みは養苗センター A のみに独自のことでない。近年、ヴィクトリア州では他の州と同様に地域に固有の植物を積極的に保護する試みが進められている。ヴィクトリア州で繁殖する多くの雑草が海の向こうからやってきた植物であると認識される一方で、オーストラリアに固有の植物であっても特定の地域外に繁殖地を増やすネイティブ・プランツもまた雑草とみなされることが様々に明記されるようになってきている。以下、参照のこと。<<https://www.education.vic.gov.au/Documents/school/teachers/teachingresources/discipline/science/weedwarrior.pdf>> (accessed on May 21, 2020)
 - 16) 國分功一郎は著作『中動態の世界』の中で、能動態と受動態のどちらかに区別されがちな人の行為を、それら 2 つの外部にあるもう一つの「態」である中動態という視点から考察している。國分は人の行為を能動か受動かの単純な二分類とする難しさを論じており、中動態のあり方に一つの答えを導き出した。彼は中動態的な行為を「完全に自由になれないということは、完全に強制された状態にも陥らないということである。中動態の世界を生きるとはおそらくそういうことだ」と論じている (國分 20018: 293)。この國分の言葉を借りるとすれば、本論の M 氏にみられる「どちらも分類できない様子」は中動態的なあり方と言えるかもしれない。
 - 17) フィッツロイの発展とアボリジナル・コミュニティについて次の URL を参照のこと。<<https://www.yarracity.vic.gov.au/the-area/aboriginal-yarra>> (accessed on May 21, 2020) .
 - 18) メルボルンにあるアボリジナルの選手を集めたフットボールクラブ「Fitzroy Stars」に関しては次の URL を参照のこと。<<https://www.abc.net.au/news/2015-08-29/fitzroy-stars-koori-pride-revived-in-once-star-team/6733364?nw=0>> (accessed on May 21, 2020) .
 - 19) また 1934 年には『ウォークアウト』と呼ばれる雑誌が刊行され、セントラル・オーストラリアへの旅がアボリジナル・アートと共に紹介され、ヨーロッパ系オーストラリア人たちの数々の英雄的な探検物語と一緒に内陸部の写真が収められた (Griffiths 2009: 177)。
 - 20) グリフィスは、20 世紀初期のヨーロッパ系オーストラリア人たちにとって、大陸内陸部への旅が新たな意味を持つものになっていったことに注目し、そうした旅を「巡礼」と呼んでいる (Griffiths 2009: 174)。特に「セントラル・オーストラリア」(Central Australia) あるいは「レッド・ハート」(Red Heart) と呼ばれる大陸中央部への旅が多くの人々を駆り立てたという。
 - 21) 映像筆者所有。
 - 22) オーストラリア版のガーディアン紙は以下参照のこと。<<https://www.theguardian.com/books/2019/may/24/dark-emu-infinite-potential-our-kids-have-grown-up-in-a-fog-about-the-history-of-the-land>> (accessed on May 21, 2020) .
 - 23) アボリジナルの子供たちを親元から奪い去ることは 19 世紀末よりも前におこなわれてきたが、行政の政策として採用されるようになったのは 19 世紀末のことである。また子供たちのアボリジナル・コミュニティからの取奪がいつ頃始まったのかについては不明とされている (シーゲル 2007:

68-69)。

参考文献

- Altman, Jon. and William, Fogarty. (2010) Indigenous Australian as 'No Gaps' subjects: Education and development in remote Indigenous Australia. In Iiana Snyder and John Nieuwenhusen (eds.) *Closing the Gap in Education: Inprising outcomes in Southern World Societies*, Victoria: Monash University Publishing, pp. 109-128.
- Bookchin, Murray. (1990) *Remarking Society: Pathways to a Green Future*. Boston: South End Press.
- Boyce, James. (2009) *Van Diemen's Land: A History*. Melbourne: Black Inc.
- Cerwonka, Allaine. (2004) *Native to the Nation: Disciplining Landscape and Bodies in Australia*. Minneapolis and London: University of Minnesota Press.
- Clarke, Marcus. (1876) Preface. In Adam Lindsay Gordon's *Sea Spray and Smoke Drift*, Melbourne: Clarson, Massina & Co., pp.v-vi.
- Gammage, Bill. (2011) *The Biggest Estate on Earth: How Aborigines Made Australia*, NSW: Allen & Unwin.
- Griffiths, Tom. (2009) *Hunters and Collectors : The Antiquarian Imagination in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ireland, Tracy. (2003) "The absence of ghost": landscape and identity in the archeology of Australia's settler culture. *Historical Archeology*, Vol.37, No.1, pp.56-72.
- Kendal, Dave. (2011) Potential effects of climate change on Melbourne's street trees and some implications for human and non-human animals, *Proceedings of the 2011 State of Australian Cities Conference*, 29 November - 02 December 2011, Melbourne [Refereed Conference Paper].
- Langton, Marcia. and Zane Ma. Rhea. (2009) Indigenous Education and the ladder to prosperity. In Helen Sykes (ed.) *Perspectives, Future Leaders*, pp.95-119. <http://www.futureleaders.com.au/book_chapters/pdf/Perspectives/Langton_Ma_Rhea.pdf> (accessed on May 21, 2020) .
- McKenna, Mark. (1996) *The Captive Republic: A History of Republicanism in Australia 1788-1996*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mirmohamadi, Kylie. (2006) Talking about native plants. *Colloquy* (12). Melbourne: Monash University. <http://artsonline.monash.edu.au/colloquy/423/> (accessed February 18, 2017)
- Moreton-Robinson, Aileen. (2003) I Still Can Call Australia Home: Indigenous Belonging and Place in a White Postcolonizing Society. In Sara Ahmed, Claudia Castaneda, Anne-Marie Fortier, and Mimi Sheller (eds.) *Uprootings/Regroundings: Questions of Home and Migration*, Oxford: Berg, pp.
- Pascoe, Bruce. (2014) *Dark Emu: Black Seeds, Agriculture or Accident?*. Western Australia: Magabala Books.
- Read, Peter. (2000) *Belonging: Australians, Place and Aboriginal Ownership*, Cambridge: Cambridge university Press.
- Robin, Libby. (2013) Histories for Changing Times: Entering the Anthropocene?. *Australian Historical Studies* (44), pp.329-340.
- Salter, Colin. (2013) *Whiteness and Social Change: Remnant colonialism and White Civility in Australia and Canada*, Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- Wilding, Michael. (1997) Weird Melancholy: Inner and Outer Landscapes in Marcus Clarke's Stories. *Studies in Classic Australian Fiction*, pp.9-31.
- 國分功一郎 (2018) 『中動態の世界：意思と責任の考古学』 東京：医学書院。
- シーゲル, マイケル. (2007) 「人種主義と二十世紀の世界：オーストラリアの『盗まれた世代』の例」『社会と倫理 (21)』南山大学社会倫理研究所, pp.63-76.
- 前川真裕子 (2017) 「オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える『理想的なオーストラリア』」『国立民族

- 学博物館研究報告』42巻1号, 国立民族学博物館, pp.71-118.
- 前川真裕子 (2019)「ヨーロッパ系オーストラリア人たちとブッシュの自然：ネイティブ・プランツの養苗センター A を中心に」No.123, 日本オセアニア学会, pp.1-11.
- 前川真裕子 (2020)「土着の自然とかがわるなかで形成されるもの：ネイティブ・プランツを育てるヨーロッパ系オーストラリア人」『カルチュラル・グリーン』第1号, pp.53-68.
- 森岡正博 (1996)「ディープエコロジーの環境哲学—その意義と限界」伊東俊太郎編『環境倫理と環境教育』(講座 文明と環境第14巻) 東京：朝倉書店, pp.45-69.
- ラトゥール, ブルーノ. (2007)『科学論の实在：パンドラの希望』東京：産業図書。

Plurality in practices in native plants' nursery in Australia:

Relationships with different human/non-human actors

Mayuko MAEKAWA

Abstract

The article examines Australian attitudes towards the surrounding environment with native plants. In particular, those people who work at a nursery centre for native plants in Melbourne are focussed on. I pay attention to those workers who constantly experience the displacement of native plants by invasive weeds, placing themselves in complex relationships with different human/non-human actors. While previous studies show that native plants as a national icon encourage Australians to design Australian-ness, I present an alternative aspect in which workers develop broad-ranging perspectives towards Australia by accessing relationships with different actors.

Keywords: Australia, Nature and Human, Native Plants, Plurality, Actors

